2021 年 3 月 23 日放送

# 個別健診と集団健診の長所･短所

**峯小児科**
**院長　峯　眞人**

**乳幼児健診**

本日は乳幼児健診、特に集団健診と個別健診の長所と短所についてお話します。

まずその前に、乳幼児健診の目的等について少しお話します。乳幼児健診の目的が最近変化してきています。疾病志向から健康志向へ、保健指導から育児支援へ、そしてスクリーニングから育児支援まで幅広く網羅するための連携づくりへと変化をしてきています。

その中で、乳幼児健診のかたちについて少し触れたいと思います。母子保健法に基づく公的な健診、また保護者の意思で受ける私的な健診、保健センター等での集団健診、そして医療機関での個別健診等があります。

乳幼児健診の時期ですが、胎児期からの健診としてはプレネイタル・ビジット（出産前小児保健指導）がありますし、生後 2 週間健診、1 か月健診、4 か月健診、6～7 か月健診、10 か月健診、1 歳児健診、そして母子保健法による 1 歳 6 か月健診や 3 歳児健診があり、5 歳児健診等があります。

乳幼児健診は何のために行うのかというと、私どものような医療関係者の健診を提供する側の考え方としては、疾患や障害の早期発見とそのスクリーニング、そして早期の治療や早期の療育への橋渡し、さらには育児支援、例えば育児不安解消や育児情報の提供、育児環境の把握、家族支援等があります。一方、健診を受ける側であるご両親の思いに触れますと、健康であるか順調であるかお墨付きが欲しいというのが 1 番です。そして、子育てについて相談し安心感を得たい、さらには健診の知らせが届いたので単に受けに来たという場合も公的健診ではあります。

スクリーニングとしての健診についての内容は、当然のことながら身体発育のチェックや精神発達・運動発達のチェック、さらには身体的異常と発達異常の告知、そして告知した異常につい

ての経過観察や事後処置への誘導等があります。

育児支援としての健診の内容は、家族のライフスタイルを考慮した支援が必要になります。さらには保護者の育児感情や育児環境を考慮した支援も重要です。そして健診は必ずしも子ども達のためだけに行うものではなく、親育ちの場としての健診も重要になります。例えば、具体的な育児の悩みを知ったり、分かりやすく指導する機会としたり、あるいは異常を見つける健診から親の学習の場としての健診を目指すというのも最近の重要な課題になっています。

**集団健診と個別健診**

これから集団健診と個別健診のお話をしたいと思いますが、まず 2 つの健診の大きな違いは、健診に関わるスタッフの違いです。

集団健診では医師（小児科医、内科医、産婦人科医等、市町村の契約に基づく）、歯科医師、看護師、助産師、保健師、栄養士、心理士、場合によっては家庭児童相談員等が同席します。一方個別健診では、医師（主に小児科医、時に内科医・産婦人科医）、看護師、医療機関によっては栄養士や心理士、保健師がいることもありますが、多くは医師と看護師だけで進めるのが個別健診のスタイルだと思います。

その中で、集団健診の問題点について触れたいと思います。まず、健診の日程を選べない、健診の医師を選べない、待ち時間が長くなる、個々の発達の継続的な管理が難しい、家族への説明が不十分になりやすい、関係職種による説明の不一致が生じやすい、医療機関との連携がとりにくい等があります。しかし、それをそのままにするわけにはいかないため、当然その問題点を解消する工夫が必要になります。その工夫によって問題点は解決に向かいます。まず、受付時間の細分化によって待ち時間の短縮や、待ち時間を利用した育児支援の資料準備、絵本やおもちゃの整備、さらに育児資材をこの時間に供覧してもらうことも一つの工夫として考えられます。さらには受診者の個々のニーズをあらかじめ把握できないか、例えば個々の相談希望の内容を

集団健診と個別健診の問題点

**健診にかかわるスタッフの違い**

**集団健診**
- 医師［小児科医、内科医、産婦人科医など］
- 歯科医師、看護師・助産師、保健師、栄養士、心理士、家庭児童相談員など

**個別健診**
- 医師［標榜科によって小児科医、一部内科医、産婦人科医など］
- 看護師、医療機関によって栄養士、心理士、保育士など

集団健診の問題点

- **健診日を選べない**
- **健診医を選べない**
- **待ち時間が長い**
- **個々の発達の継続的管理が困難**
- **家族への説明が不十分になりやすい**
- **関係職種による説明の不一致が生じる**
- **医療機関との連携が取り難い　　など**

集団健診の問題点解消への工夫

- **受付時間の細分化による待ち時間短縮の工夫や、待ち時間の有効利用(育児支援資料の準備、絵本・おもちゃ等の整備、育児資材の供覧など)**
- **受診者個々のニーズの把握**
  **(個々の相談希望内容を事前把握し、対応職種へ事前提供し、健診時の支援に利用することなどは満足どを上げるはず)**
- **乳幼児健診に関する地域開業小児科医・病院小児科医との情報交換機会確保**

事前に把握をして対応する職種に情報提供をし、健診時の支援に利用する等は恐らく満足度を上げる一つのツールかと思います。さらには乳幼児健診に関する地域開業小児科医あるいは病院の小児科医との情報交換の機会が確保される必要があります。

一方個別健診の問題点は、健診の医師のレベルの差が大きい、健診スタッフの職種・数・質に差が出てしまう、あるいは視聴覚健診が困難である、受診者の満足度に差が出てしまう、あるいは事後指導、療育体制の連携が難しい、最終的な統計処理が難しい等があります。問題点の解消の工夫として、健診医への研修の実施による質の確保、これは極めて重要です。さらにもう一つ重要なのは、健診票あるいは問診項目への工夫です。これは後程述べます。そして判断基準の統一性が確保されないといけません。また公的健診では行政担当者との情報共有が必要です。あるいは小児科以外の他科、多職種との連携の体制づくりも重要ですし、事後評価のための基準作りも重要になってきます。

その中で先ほど触れた健診票の重要性についてお話します。対象の子ども達や保護者等からたくさんの客観的な情報を収集して的確な判断を下すためには健診票の充実が極めて重要です。特に集団健診と個別健診の質の差をできる限り小さくするためには、健診票の内容の充実とその結果の評価、あるいは対応、事後処置等をいかに進めていくかがカギになります。同じく健診票にどのような質問項目を盛り込むかというと、家族構成、出生状況、既往歴、健診受診歴、発達状況、予防接種歴、運動発達や精神・言語発達、社会性の発達を評価する質問、生活習慣やしつけ、起床や就寝の時間、テレビの視聴時間等自覚を促す質問も網羅されるべきです。さらには哺乳や食事内容・おやつ等の栄養管理についての質

個別健診健診の問題点

- **健診医のレベルの差が大きい**
- **健診スタッフの職種・数・質に差がある**
- **視聴覚健診が難しい**
- **受診者満足度に差がある**
- **事後指導・療育体制との連携が難しい**
- **統計処理が難しい**

個別健診の問題点解消への工夫

- **健診医への研修の実施による質の確保**
- **健診票・問診項目の工夫**
- **判断基準の統一性の確保**
- **公的健診では行政担当者との情報の共有**
- **他科・他職種との連携体制の構築**
- **事後評価のための基準作り**

健診票の重要性

- **対象児や保護者などからの多くの客観的な情報を収集し、的確な判断を下すためには、健診票の充実が極めて重要**
- **特に集団健診と個別健診の質（クオリティ）の差をできる限り小さくするためには、健診票の内容の充実とその結果の評価、対応、事後措置などをいかに進めていくかが鍵。**

健診票に盛り込むべき質問項目

- **家族構成、出生状況、既往歴、健診受診歴、発達状況、予防接種歴の質問**
- **運動発達、精神言語発達、社会性の発達を評価する質問**
- **生活習慣・しつけ、起床・就寝時間、テレビ視聴時間など自覚を促す質問**
- **哺乳、食事内容、おやつなど栄養関連の質問**
- **視覚・聴覚の異常を確認する質問**
- **育児感情、育児環境把握のための質問**

問だったり、視覚・聴覚の異常を確認する質問、そして育児感情や育児環境の判断のための質問もとても重要になってきます。

**満足度の高い健診を目指すには**

その上で、集団健診・個別健診の利点を考慮した例えば満足度の高い健診を目指すにはどうすれば良いかというと、医師や多くのスタッフの優しさのある対応と話しやすい雰囲気づくりが基本中の基本です。さらには医学的根拠や知識を基にした正しい指導が必要になります。そして、正確で分かりやすいパンフレット等の資料の利用や提供も重要です。さらには健診に関わる担当者が子育て支援・子ども支援の協力者だという自覚を持ってもらわなくてはなりません。そして何といっても笑顔で終われる健診を心掛ける気持ちが重要になります。お互いに疑問や嫌な感情をもって健診を終えることは決してよくありません。

集団健診の利点と個別健診の利点を考慮した
満足度の高い健診を目指すには

- **医師や多くのスタッフの優しさのある対応と話しやすい雰囲気作りが基本**
- **医学的根拠や知識を基にした正しい指導**
- **正確で分かりやすいパンフレットなどの資料の利用や提供**
- **健診にかかわる担当者が子育て支援、子ども支援の協力者だという自覚**
- **笑顔で終われる健診を心がける気持ち**

**コロナ禍での健診**

それでは、現在行われている健診について私が最近感じていることを最後にまとめてみたいと思います。現在新型コロナウイルス感染症の影響もあって、集団健診の場が設けにくい状況が続いています。そして乳幼児健診の健診率が下がってきています。特に個別健診を主体として行っている地域ではそれほど健診率は下がっていませんが、集団健診の場がなかなか3 密を避けにくいとか、ご両親を含めた家族の方も実施場所に行きにくいといったこともあり、健診率が下がっているようです。

しかし、ご存知のように乳幼児健診を行う時期は key month と言いますが、子ども達の現在の月齢・年齢によって、それに合った発達や発育があるかどうかを診るものですので、3 密を避けるためにその時期をずらすということは決して良いことではありません。むしろ本来はきちんとした診断ができるべき、あるいは診断によって治療や療育に繋がるべき子どもたちへの対応が先送りにされてしまう可能性がないとは言えません。やはりこの時期にきちんと受けていただくということがとても重要です。

新型コロナウイルスの感染ばかりに偏った情報が子育て中の親御さんの周りにあふれかえっている今だからこそ、集団や個別等の健診の形態にこだわることなく、子育て~~の~~支援あるいは子ども支援の場としての乳幼児健診を受けてもらうこと、あるいは私たち医療機関や行政が乳幼児健診の場を提供していくこと、そして子ども達とご両親に、健診の場を十分利用していただくことで子育て支援につなげていければと思うところです。是非皆さんにもご協力をお願いします。

「小児科診療 UP-to-DATE」
http://medical.radionikkei.jp/uptodate/